

# 授業改善の ポイントは ここだ!

## 国語科



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官

菊池 英慈

### I 育成すべき資質・能力を明確にする

今回の改訂では、育成を目指す資質・能力が重視され、国語科の学習指導要領の目標にも「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。」と示されている。その上で、資質・能力を示した「内容」の(1)の指導事項の書きも「〜に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。」としている。

新学習指導要領に基づいた授業を構想する際には、この指導事項を基に、子供たちにとって必要な資質・能力を明確にしていくことが大切である。そのためには、指導事項の解説を読み、児童が実際にどのような姿になればよい

のかを具体的に想定していくようにする必要がある。

また、「知識及び技能」に示されている言葉の特徴や使い方などの「知識及び技能」は、個別の事実的な知識や一定の手順のこののみを指しているのではない。国語科で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く「知識及び技能」として身に付けるために、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められるなど、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」は、相互に関連し合いながら育成されることが必要である。

### II 指導のねらいを重点化した学習過程を工夫する

新学習指導要領では、ただ活

動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、現行学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理している。この整理を踏まえ、「思考力、判断力、表現力等」の各領域において、学習過程を一層明確にし、指導事項を位置付けている。しかし、各領域とも指導事項に示されている順番どおりに指導する必要はない。子供たちの実態に照らし合わせながら、指導のねらいを重点化し、学習過程を工夫する必要がある。

例えば、「B書くこと」の「情報の収集」を重点的に指導する場合、「構成の検討」をした後に再度「情報の収集」を位置付けて指導することが考えられる。また、「記述」の指導を重点的に行う場合、すでに書いたものを基に書く相手や目的、文種を変えて書き換えるといった学習過程を工夫することが考えられる。

このように、指導のねらいを重点化し、学習過程を工夫していくようにする。

### III 育成すべき資質・能力を他領域や他教科と関連を図る(カリキュラム・マネジメント)

まず、当該学年の「思考力、判断力、表現力等」の3領域のうち、課題となっている領域を明確にし、重点となる単元を絞り込んでいくようにする。その上で、その単元(教材)の配列時期や配当時間などを検討し、単元ごとに確実に力が身に付くようにすることが大切である。また、領域内ばかりでなく領域間でも、学んだことが他領域の学習内容に生かせるように位置付けていくと更に効果的である。

さらに、国語科は教科等を越えた全ての学習の基盤となる言語の能力を育成する教科であり、各教科等と効果的に関連を図っていくことが重要である。例えば、「A話すこと(聞くこと)」の話手が伝えたいことや自分が聞きたいことを聞くインタビューなどは、社会科の商店街や工場見学と関連を図っていくことが考えられる。このように、教科横断的な視点をもって国語科の授業づくりを進めていくことが重要である。

# 授業改善の ポイントは ここだ!

## 社会科



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

おぐらのり  
小倉 勝登

### I 問題解決的な 学習過程の充実

今回の改訂においても小学校社会科の学習においては、問題解決的な学習過程の充実が求められる。このことは、学習指導要領の第3指導計画の作成と内容の取扱い1(1)において、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けた配慮事項として示されている。

### II 「主体的・対話的で 深い学び」の視点から の授業改善

#### 1 学習の見通しをもつ

まず、「主体的な学び」の視点から大切にしたいことは子供たちが「学習の見通しをもつ」ことである。「学習の見通しをもつ」

とは、子供たちが学習問題(問い)を把握し、生活経験や既習を基に予想し、学習計画を立てるといった問題解決への見通しをもつことである。

問題解決的な学習において、「学習問題(問い)」が重要な役割を果たしていることは言うまでもないが、その上で、子供たちが学習問題(問い)を立てる前後で「予想すること、この活動を大切にしたい。子供たちは、まず、生活経験や既習と結び付けて解決のために予想するからである。子供自らの予想こそ、学習問題(問い)につながり、学習への見通しにつながっていく。もちろん、生活経験と結び付かない、既習では予想が難しいものは、資料を提示するなどの工夫が必要である。

つまり、子供たちが、「学習問題(問い)を把握することや「予想をする」ことを丁寧に取り組むことで、子供による問題解決の見通しにつながるのである。これは、「主体的な学び」の視点にとどまらず、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりにおいて極めて重要な鍵になる活動である。

#### 2 関わり合いながら学ぶ

次に、「対話的な学び」の視点から大切にしたいことは子供たちが「関わり合いながら学ぶ」ことである。子供たちは、調べたことや考えたことを交流することで自分の考えを深めることができ、交流により多様な見方・考え方へと鍛えられるからである。つまり、関わり合いながら学ぶ場は、子供たちが多様な視点を身に付け、社会的現象の特色や意味を多角的に考えられるように位置付けることで、「深い学び」の鍵となる「社会的現象の見方・考え方を働かせた授業づくりにもつながるのである。

#### 3 まとめる

ここで大切なことは子供の中に「なぜ、話し合うのか、なぜ、人に話を聞くのか」という目的が明確になっていることである。話し合う必然性を子供たちが感じているかが鍵となる。

最後に大切にしたいことは子供たちが、「まとめる」ことである。「まとめる」とは、子供たちが、調べたこと、わかったこと、考えたことを文章でまとめたり、白地図や年表、図表などにまとめたりしたものを基に、自分の考えを説明することである。また、それだけではなく、自分の学習を振り返って、考えたことなどをまとめることである。

このことは、子供たちが、自身の学習成果を踏まえて新たな問いを見いだしたり、学んだことを基に自らの生活を見つめたり社会生活に向けて生かしたりする「主体的な学び」の視点のみならず、社会的現象の見方・考え方を働かせる「深い学び」の視点からも重要である。

# 授業改善の ポイントは ここだ!

## 算数科



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官

笠井 健一

算数科においては、単元などの内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、数学的活動を通して、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象を数理的に捉え、算数の問題を見いだし、問題を自立的、協働的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習の充実を図ることが大切である。授業の協議会で、まず、授業のねらいを児童は達成できたのかを確認してほしい。

算数科の指導に当たっては、(1)「知識及び技能」が習得されること、(2)「思考力、判断力、表現

力等」を育成すること、(3)「学びに向かう力、人間性等」を涵養<sup>かん</sup>することが偏りなく実現されるよう、単元など内容や時間のまとまりを見通しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが重要である。

児童に算数科の指導を通して「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指す授業改善を行うことはこれまで多くの実践が重ねられてきている。そのような着実に取り組まれてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならぬと捉えるのではなく、児童や学校の実態、指導の内容に応じ、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点

から授業改善を図ることが重要である。

とすると、授業の協議会では、まず最初に「本時で育成を目指す資質・能力が実際に児童一人一人に身に付いたのか」をまず問うことが大切である。全員が身に付けることができたとすれば、主体的・対話的で深い学びという視点から、どういう指導がよかったのか、身に付けることができなかったとしたら、どういう指導をするとよくなったのかを話し合うのである。

児童自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりするなどの「主体的な学び」の観点から指導を振り返るのである。

また、数学的な表現を柔軟に用いて表現し、それをを用いて筋道を立てて説明し合うことで新しい考えを理解したり、それぞれの考えのよさや事柄の本質について話し合うことでよりよい考えに高めたり、事柄の本質を明らかに

したりするなどの「対話的な学び」をすることで、自らの考えや集団の考えを広げ深めていたのかを検討するのである。

さらに、日常の事象や数学の事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、数学的活動を通して、問題を解決するよりよい方法を見いだしたり、意味の理解を深めたり、概念を形成したりするなど、新たな知識・技能を見いだしたり、それらと既習の知識と統合したりして思考や態度が変容するといった「深い学び」になっていたかを検討するのである。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。数学的な見方・考え方が学習を通して成長していくものであることに配慮し、それぞれの学年の各領域で働く数学的な見方・考え方を明らかにしておくことも大切である。

# 授業改善の ポイントは ここだ!

## 理科

### Ⅰ 小学校理科の目標

今回の改訂では、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に整理された。それに伴い、各教科等の目標及び内容もこの3つの柱で整理された。

自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官

なるかわ てつや  
鳴川 哲也

(1) 自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。

(2) 観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。

(3) 自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

### Ⅱ 授業改善のポイント

各学年の目標及び内容の構成も、教科の目標が具現されるよう、育成を目指す資質・能力によって整理されている。つまり、日々の授業においては、当然ながら、どのような資質・能力を育成

しようとしているかを意識して授業を行う必要がある。

では、実際にどのような視点で授業改善を行っていくことが重要なのか。今回の改訂では、授業改善の視点が、重要なキーワードとして示されている。それが「主体的・対話的で深い学び」である。

この「主体的・対話的で深い学び」は、これらの学びを実現すること自体が目的ではなく、資質・能力の育成に向けての授業改善の視点として示されたものである。

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3つの視点は、子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、それぞれ影響し合うものであるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意する必要がある。

「主体的な学び」の視点として、例えば、自然の事物・現象から問題を見いだし、見通しをもって観察、実験などを行っているか、自らの学習活動を振り返って

意味付けたり、得られた知識や技能を基に、次の問題を発見したり、新たな視点で自然の事物・現象を捉えようとしたりしているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。

「対話的な学び」の視点として、例えば、問題の設定や検証計画の立案、考察の場面などで、あらかじめ個人で考え、その後、意見交換したり、根拠を基にして議論したりして、自分の考えをより妥当なものにする学習となっているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。

「深い学び」の視点として、例えば、「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決の過程を通して学ぶことにより、理科で育成を目指す資質・能力を獲得するようになっているか、様々な知識がつながって、より科学的な概念を形成することに向かっているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。児童の実態、指導の内容に応じて、これらの視点で授業改善を図っていたきたい。